

# 集落の生活と集落の土地利用の変遷に関する研究 - 岩手県旧大東町曾慶集落を例に -

三浦隆博（岩大院農）・岡田秀二（岩大農）  
佐々木一也（岩大附属 FSC）・岡田久仁子（東北開発研究所）

## 背景と課題

中山間地域では耕作放棄地、荒廃地が増加を続け、間伐が進んでいない森林も多くある。高齢化や労働力不足、急峻な地形、個々の農家の就業や経済状況の変化など多くの要因が指摘されている。耕作放棄地対策の一つとして、中山間地域等直接支払制度が挙げられる。多くの集落で対処活動が行われ成果があるという。集落協定が特徴の事業であり新たな観点からのものである。本研究では、耕作放棄地の発生と林野整備の遅れに関し、個々の農家の生活の現状と、そこでの集落機能・活動の実態との係わりからみること、集落内のどの土地・林野では保全と土地利用がされ、どの土地・林野では耕作放棄されることとなっているのか、間伐が遅れているのはどんな集落か構成農家なのか等、集落における農林家生活と今日的土保に関し事例調査を行った。調査対象地と分析方法

対象地は岩手県旧大東町曾慶集落である。総戸数 388 戸、総農家数 315 戸、経営耕地面積約 280ha で耕作放棄地は約 57ha(2000 年センサス)と増加し続けている。分析は、耕作放棄地や間伐等の森林整備の現状を整理し、詳しい実態に関してや集落住民が中山間地域等直接支払制度などを活用し、耕作を再開した土地について、所有者や森林組合、集落の代表者等から聞き取りを行い、個々の農家や集落機能・活動の現状を整理し、その要因や農地と林地には因果関係があるのか分析した。

## 分析

農地：曾慶集落第 5 区に着目した。この地区は、総戸数 68 戸、総農家数 50 戸、経営耕地約 36ha で耕作放棄地は約 10ha(2000 年センサス)である。この地区の 2000 年の航空写真と地籍図から、どの土地が耕作放棄されているのかを整理し、現時点での土地利用の状況を把握、耕作放棄地の増減を明らかにした。放棄地の顕著な土地に関し、個々の所有者などからその要因について聞き取りを行い、集落活動などを通じ耕作を再開した土地については、なぜその土地なのかなどに関し集落の代表者に聞き取りを行った。

林地：曾慶集落全体が対象。総面積は約 860ha、うち 96%は個人有である。樹種別に見ると、スギ 30%、アカマツ 13%、その他広葉樹 50%である。林齢は、スギの 75%が 36 年生以上で、これはどの樹種でも同様の傾向を示す。これらを踏まえ、森林現況図からどの地域にどんな樹種と林齢の森林があるのかを把握し、森林現況表から詳細について整理した。そして、間伐補助金による林小班毎の整備記録から、どの林小班で整備が遅れているのかを明らかとする。その部分の林野に対し、所有者や森林組合に対し聞き取りを行い、その原因や林野整備に関する課題を整理した。

## 今後の課題

集落などによる活動によって耕作を再開した土地や森林整備が行われている林野に対し、一時の活動によるものではなく、今後も続けていくにはどのような条件が必要なのか、個々の農林家の状況や今日的集落機能の発現条件、集落住民による活動の有無だけではなくその詳細な活動状況、さらには政策による補助金などの支援を含めた様々な要素を詳しく見ていく必要がある。

（連絡先：三浦隆博 [a3206028@iwate-u.ac.jp](mailto:a3206028@iwate-u.ac.jp)）